

Decision Making for the Compromised Teeth

欠陥歯における意思決定

Compromised toothを欠陥歯と訳した。聞き慣れない言葉であるがここでは歯内療法の適応を考える際に「その他の複合的な問題（歯質の過小性、医源的穿孔、エンド・ペリオ病変、外・内部吸収、等）を抱えた歯」ととらえていただければ想像いただけるかと思う。インプラントによる歯科治療が良好な予後を保障するようになり、抜歯の診断基準におけるハードルが以前と比較して低くなっている事は否めない感がある。北米ではインプラント学を歯内療法専門医教育に取り込む流も出てきているが、果たしてこれが正しい方向性であるかどうかは、時の流れが答えを出してくれることになるであろう。一方、人工歯根の選択肢がない時代は、歯牙保存の失敗がイコール義歯になるという状況の中で、歯内療法専門医は非常に困難な条件であったとしても、果敢にその状況の打開に取り組まなければならなかった。

臨床においては様々な要件を総合的に判断して抜歯か保存かの決定をくだす事が通常であり、特に欠陥歯の意思決定においては患者が理解した上で、意思決定に対する同意を得る事がきわめて重要である。

この講演では、真の患者利益につながる欠陥歯治療の臨床的基準について再考する